

大東文化大学合同研究会「大河内文庫を考える―大河内一男を中心に―」

第1部 大河内文庫創設の経緯及び文庫の特徴について

「大河内文庫の学術的特徴について」

大東文化大学環境創造学部環境創造学科教授 大杉由香

はじめに

現在、大東文化大学板橋図書館に置かれている大河内文庫は、筆者が以前大東 BOOKS 第20号（2012年3月30日発行）の「図書館における大河内文庫の創設と現況」でも紹介したように、2008年春より大河内暁男東京大学名誉教授（本学経営学部元教授、英国経営史専攻、1932-）から、暁男先生の蔵書のみならず、大河内一男東大元総長（社会政策学者、1905-84）および暁男先生の昭子夫人（元東京女子大非常勤講師、統計学専攻、故人）の蔵書・資料¹寄贈を受けたことから設立された。その後、図書館で蔵書整理は進められ、2012年には図書に関しては整理がほぼ終わり、3冊の『大河内文庫目録』I-1、I-2・IIが冊子版とCD版の両方で発刊され、主要大学の図書館や研究所等にも配布された。現在は1次史料を中心に整理が進みつつある。

大河内文庫は和書14666冊、洋書3763冊、和装本151冊の他に、戦前戦後にかけての労働、戦後の社会保障関連の貴重な1次史料で成り立っているが、ここでは(1)大河内家の視点から見えてくる特徴(2)学問諸分野の視点から見た特徴(3)貴重資料（史料）²・貴重図書の一部紹介の3つに分けて考察することとする。

1. 大河内家の視点から見えてくる特徴

筆者は本来であれば、大河内家に関わる図書・資料に関して門外漢の立場にあるが、暁男先生にかつて直接教わった経験もあってか、今回の大河内文庫設立に際しては、ある時は色々とお話を伺い、またある時は図書・資料の運搬に関わる等、素人ながらもそれなりに関係してきた。その意味では客観的立場から大河内文庫を評価しにくい立場とも言えるかも知れない。だがそれ故に見えてきたことも含めて、ここでは叙述したい。

まず大河内文庫は大河内一男・暁男・昭子各先生の蔵書とはいえ、恐らく蔵書の4分の3程度は一男氏の購入によると思われる。と言うのは、1980年代前半までに出版された本が多く、一男氏没後に購入されたと思われる本は文庫の中では多いとは言えないからである。この事実はそれだけ一男氏の研究意欲が並でなかったことを傍証していよう。実際に一男氏は亡くなる直前まで研究に意欲を燃やしており、それは蔵書の購入のあり方にも表れていた。たとえば亡くなる直前、本来であれば行く予定であったドイツでの学会発表に備えていたのか、社会経済国民会議編・発行『欧州再生への道：第5次労使関係調査団報

¹ 後述のように、大河内一男氏の父で、速記者の待遇改善に大きな貢献をし、新講談作家としても知られる大河内翠山(本名・發五郎、1880-1938)が利用したと思われる資料も僅少ではあるが、存在する。

² 資料と史料の定義については、データという意味では資料、武田知己本学法学部教授が言うような一点モノあるいは原典に近いと思われる場合は史料の字を用いることとした。武田先生からはこの原稿についての詳細なご指摘を戴き、厚くお礼申し上げます。

告書』、1982年等も購入している³。

他方で一男氏は客観的分析を重んじ、教え子からは「没個性的」「いくらか皮肉屋の貴公子的な批評家」と評されたこと⁴からも判るように、特定の宗教を信仰することに対しては否定的であったようで、特にキリスト教に関してはその傾向が強かったと考えられる⁵。蔵書もキリスト教関連は35冊程度で多いとは言えないうえ、キリスト教に否定的な本は、加藤弘之の本（『基督教の害毒』、金港堂書籍、1911年【OA4/190.4./Ka86】）、『基督教徒窮す』、同文館、1907年【OA4/190.4/Ka86】）や幸徳傳次郎（秋水）『基督抹殺論』丙午出版社、1911年（OA4/190.4/Ko94）等、複数冊存在するのに対し、全面的礼賛の本は内村鑑三『余は如何にして基督信徒になりし乎』、岩波書店、1935年（OA4/194f/U19）があるに過ぎない⁶。

なお一男氏は『暗い谷間の自伝 追憶と意見』（中公文庫、1979年）でも幼少期にどのような育ちをしたのか多くを語っていないが、少なくとも宗教とは距離のある家庭環境であったことは事実であり、それについては竹島茂『速記曼茶羅鉛筆供養—大河内翠山と同時代の速記者たち』（上）（下）、STEP社、2004年に詳しい。彼の父である翠山は兄で同じく速記者のパイオニア的存在となった高島政之助（1876-1926）とともに、速記者の間では豪放磊落で通っていた一方、金儲けに精を出し、同業者の一部には批判的に見られていた⁷。女性関係も派手で死後は借金が残される始末であったが⁸、妻のみよの内助の功を以て、家庭が納まっていたとされる（もっとも後年になってもみよはこのことをずっと愚痴っていたようであるが）。ちなみに翠山は一男氏をはじめ子供たちを溺愛し、一男氏については誇りに思っていたようで、たとえば彼が河合栄治郎と喧嘩したというエピソードを誇らしげに語った話も伝えられている⁹。また一男氏の講談好きは彼に教わった原朗氏（1939-、東京大学名誉教授、日本経済史専攻）をはじめ、今でも語られるところである。

ところが大河内文庫には翠山が新講談作成のために利用していたと思われる資料は後述の物を除けば、数冊程度しか見当たらない¹⁰。その理由としては下記のことが考えられよう。

第一に一男氏は東京帝国大学を卒業後すぐに結婚して独立したものの、翠山の家族とは

³ 大河内一男『経済のソフト化と労使関係』、時潮社、1986年（絶筆、直筆原稿が大河内文庫にあり）の発刊を見てもその研究意欲は明らかであろう。

⁴ 西村裕通「ある自由主義者の生きざま—大河内教授とその「破門」問題への追悼」（大河内演習同窓会編・発行『わが師 大河内一男』、耕文社、1986年、p.108）。

⁵ それを裏付けるかのように、第三高等学校時代からの親友名和統一（1906-78、紡績業研究等で著名なマルクス経済学者）の父親が一男氏に牛肉屋に連れていき、キリスト教への入信を熱心に勧めたことにはうんざりさせられていたエピソードもある（前掲『わが師 大河内一男』、1986年、pp.62-63）。

⁶ 大東文化大学図書館『大河内文庫目録 I-1』、2012年、pp.49-51。これに関連して言えば、暁男先生に以前筆者がクリスチャンかどうかをお聞きしたら、「耶蘇は嫌いです」と明言されたことがあった。

⁷ 竹島茂『速記曼茶羅鉛筆供養—大河内翠山と同時代の速記者たち』（上）、STEP社、2004年、pp.195-218。

⁸ 前掲『速記曼茶羅鉛筆供養—大河内翠山と同時代の速記者たち』（下）、STEP社、2004年、p.321、p.341。

⁹ 同上、p.321。

¹⁰ 本稿で紹介した以外では、管見の限り、永澤信之助『東京の裏面』、金港堂書籍、1909年、OA4/302.136/To46）位である。

共に暮らさず、後には妻春枝氏の母親と同居していた。他方で一男氏の妹であったつる子氏は婿養子を迎えて翠山夫婦と同居したが、一男氏がいながら婿養子にさせられたつる子氏の夫の心情もあり、両家の関係は良好とは言えなかったようである¹¹。故に翠山関連資料の多くはつる子氏の家（翠山死去時は板橋区練馬土師田町（成増）、後に川口市）にあった可能性が高いと考えられる。

第二に自分の出生や育ちにあまり触れたくない思いが一男氏にあったことが推察できる。まず彼は下谷生まれであることは色々な所で語っているが、山伏町出身である点は管見の限り伏せているきらいがある。ちなみに山伏町は下谷万年町以上に一層物騒に思われ、泥棒町として知られていた悪名高い戦前のスラムで、彼の父翠山はそこから這い上がるために¹²、学歴がなくても実力次第であった速記者としての道を選び、かつ著名な新講談作家にまでなった。それ自体、立身出世とも言えるが、とはいえ、結婚後の一男氏の翠山との距離の置き方から考えて、成り上がりの豪放磊落な父親との関係を最低限にしておきたいと考えていたことは容易に察せられる¹³。そもそも英文学を志望し、後に「真理の探究とは吾によりよき社会実現のための闘争の一形態に外ならぬ」と書いている一男氏と彼の英文学専攻に大反対した翠山の価値観には大きな隔たりがあったとしてもおかしくはない。

いずれにせよ、ご遺族から蔵書や資料の寄贈を受ける場合、時には問題を惹起することもある。第一は本来揃えられるはずの資料が欠落してしまうケースであり、今回の場合、1950年代の東京大学経済学部教授会の記録が記された大学ノートは、関係者が存命していることを理由に暁男先生の意向で寄贈許可が出なかった。さらに大河内文庫には一男氏や暁男先生の直筆原稿があるが、1979年に講談社から出版された大河内一男『人類の知的財産 アダム・スミス』の直筆原稿は寄贈されていない。筆者はその直筆原稿を実際に目にしたが、編集者の手直しが著しく原文を読み取るのが難しいほどであった。これに対し暁男先生はその編集者に憤怒の念をお持ちで、「失礼だ、恥である」と一言おっしゃって寄贈を許可されなかったのである。

第二にはご遺族が語っていることと資料の背後にある現実が異なってしまう、資料紹介の際に如何に説明したらよいか、困惑させられるケースである。暁男先生の話によれば、昭子夫人は、国民年金制度創設時に基準額に影響を与えた論文を書かれていて（越原昭子「所得階層別生計費指数」『東京女子大学論集』11(1)、1960年10月のことと思われる）、その草稿は存在していたはずだが、見つかっていないとのことであった。ところが国民年金の制度自体は1960年10月に開始し、保険料徴収は翌年4月に始まっているので、暁男先生がおっしゃるように、夫人の論文に本当に社会的影響力があったかは不明である。ち

¹¹ 8と同じ、p.348。

¹² 松平信綱の家系にありながら、一男氏の祖父であった翠堂（信徳）の代に零落したことがこうしたスラムに住む原因となったようである（前掲『速記曼茶羅鉛筆供養—大河内翠山と同時代の速記者たち』（上）、pp.25-8）。

¹³ 筆者が以前暁男先生に翠山について聞いたところ、何も覚えていないとのこと（翠山は暁男先生が6歳の時に亡くなっている）、一男氏がインタビューに応じている竹島氏の著書についても一切触れられなかった。竹島氏の著書は大河内家から板橋図書館に寄贈されているが（OA4 289.1 Ta65 1・2）、殆ど開いた形跡が見られなかったのが特徴である。

なみに 1950 年代の最低生活に関連する資料は文庫に収められているが、一男氏のコレクションか、昭子夫人の物かどうかも未だに判らないままである。

2. 学問諸分野の視点から見た特徴

(1) 原史料の視点から見えてきたこと

実は前述の問題と関連させて言えば、大河内文庫は学術的価値が高いとはいえ、原史料の視点から見れば、不完全な文庫とも言える特徴がある。

2011 年 10 月に筆者は暁男先生から社会保障関連の貴重な資料があると聞かされ、それを東京大学に寄贈したい旨を伝えられた。撮影を勧められたので、2011 年 10 月 21 日には 463 枚の写真撮影し、返却した。その資料は社会保険制度調査会（1946 年 6 月設立）におけるガリ版刷りの資料で「社会保障制度についての考究すべき諸点」（1947.9.18）等があり、戦後まもない時期に日本の社会保障のあり方についてどのような議論が政府レベルでなされていたかを示す物であった。つまり特に貴重と思われた一部史料に関しては、暁男先生の意向で東京大学経済学部寄贈されたが、2015 年度時点では東大構内に段ボールのまま入れられただけとなっている¹⁴。関連資料の分離をどう解決するかは今後の文庫運営にあたって大きな課題となりつつある。

それに加え、原史料の視点で特徴的なのは、今村力三郎（法律家、専修大学学長、1866-1954）とのつながりによるコレクションが一部に見られる点である。今村は第 5 代専修大学総長で、その後を継いだのが一男氏であったことは周知の事実である。暁男先生によれば、今村と一男氏は個人的に親しかったようで、現に今村は一男氏に多くの貴重な資料を預けたのかもしくは譲渡したものと思われる。確認できた物の特徴は以下の通りで、今後整理等を進めるにあたって専修大学との連携も必要になってこよう。

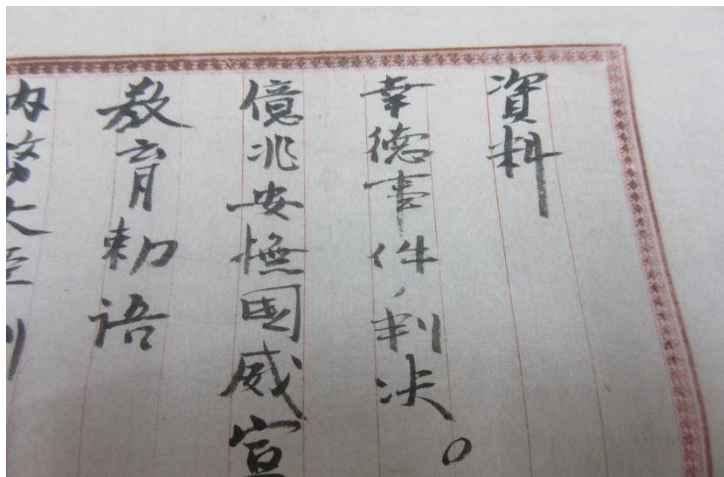
- ① まだ整理途中と思われるが、数年前に暁男先生は虎の門事件（1923 年）について書いた今村の直筆史料を持参されており、筆者もそれを確認している。ただしこの史料は恐らく専修大学今村法律研究室によって復刻されている可能性がある。
- ② 2015 年 6 月 26 日に筆者は暁男先生より「青木博士筆禍事件」と書かれた 1 次史料を一式受け取り、図書館に運搬した。これは青木徹二（1874-1930、商法学者、弁護士）が不敬罪の廃止を訴えて新聞紙法違反で裁判になった際の一連の記録で、当時の新聞の現物や今村に宛てた手紙、今村直筆と思われる史料が残されている。これは大正デモクラシー期に起きた言論弾圧事件であり今では知られておらず、専修大学今村法律研究室でも復刻がなされていないが、かなりの貴重史料と考えられる（現在、保管中でこれから整理に入る状態）。
- ③ 今村が原告側弁護士として関わった足尾鉍毒事件については、明治 30 年代に公刊され

¹⁴ 2015 年 7 月 31 日の大河内文庫合同研究会でもお世話になった石井寛治東京大学名誉教授（1938-、日本経済史専攻）が東京大学経済学部資料室に問い合わせをして下さったところ、同年 8 月 28 日に同室の特別専門職員の方からメールでお返事があったとのことであった。その内容は、(1) 2004 年と 2008 年に暁男先生から段ボール 15 箱の寄贈を受けた (2) 内容は昭和 30 年代の社会保障制度審議会関係書類等、旧総務庁や労働省に関わるものである (3) 資料価値は理解しており整理・公開の時期を見極めているといったものであった。石井先生には厚くお礼申し上げます。

た 17 冊の古い印刷物がセットになっていて、「足尾鉍毒事件資料」と書かれた箱に入れている (OA4 561.98 A92)。なお今村が関わった「青木博士筆禍事件」の中にある文書の筆跡と「足尾鉍毒事件資料」の背表紙の筆跡は同一人物と思われ (写真 1~6)¹⁵、この背表紙 (写真 2) を一男氏が書いたのではないとすれば (写真 3)、今村の直筆と考えた方が自然である。要するにこれらの箱にあった印刷物は一男氏が今村から貰い受けた資料なのであろう。とは言え、今のところ、足尾鉍毒事件と今村にまつわる手紙、足尾鉍毒事件をめぐるの二人の書簡等の 1 次史料は大河内文庫の中からはまだ見つけ出せていない。

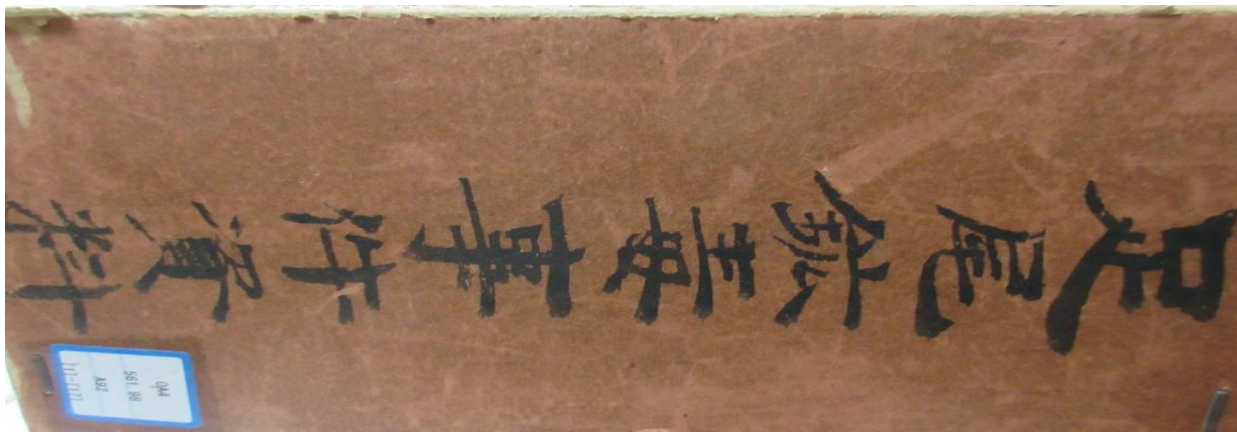
この他には戦後間もない時期の広島県での労働運動に関する記事 (ガリ版刷、未整理) も寄贈されているが、傷みが激しかったので、本来であれば緊急対応が必要であるが、今のところそこまで手が回っていないのが実態である。

(写真 1) 「青木博士筆禍事件」の一連史料から出てきた、今村法律事務所名が印刷された便箋に書かれた文書の一部

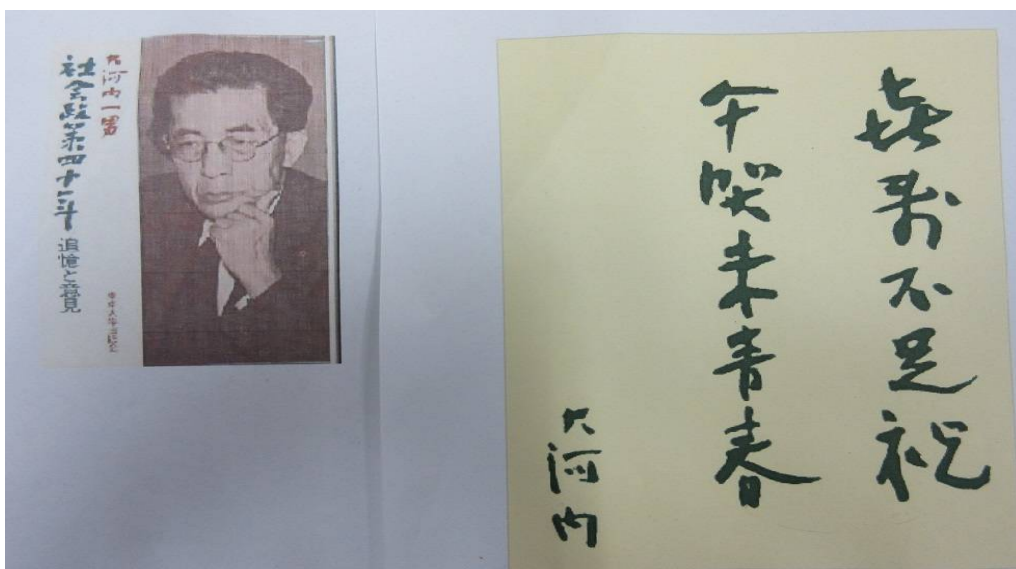


¹⁵ この度の筆跡鑑定に関しては、安達直哉大東文化大学書道学科教授 (書跡文化財学専攻) のご協力を戴いた。安達先生にはこれらの写真を 2016 年 4 月 11 日にメールでお送りし、13 日にお返事を頂いたが、明らかに一男氏の筆跡とは異なること、書いた時期が異なるのであれば、多少の相違は許容範囲であり、今村の物と判断して良いのではないかとのことであった。安達先生には厚くお礼申し上げます。なお、写真 4・5・6 は写真 1 と写真 2 の字をトレーシング・ペーパーでコピーして重ねたものであるが、資料の資の上の部分、料の字の左側が重なること、また件の字は相似形のように重なっているのが判る。

(写真2) 足尾鉍毒事件資料と書かれた背表紙



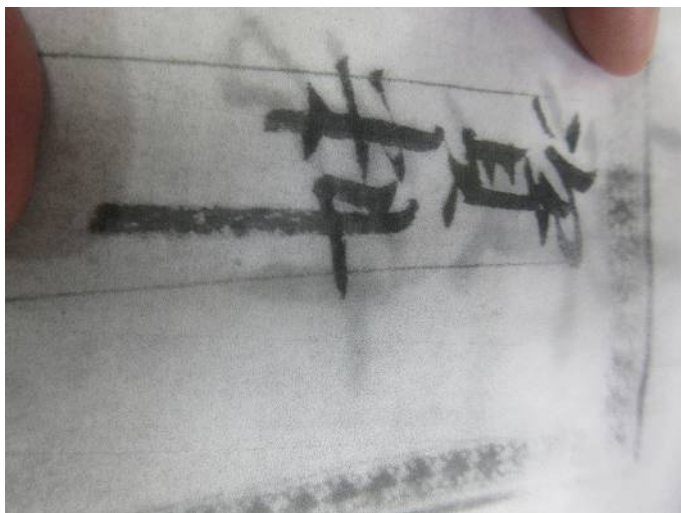
(写真3) 大河内一男氏の筆跡



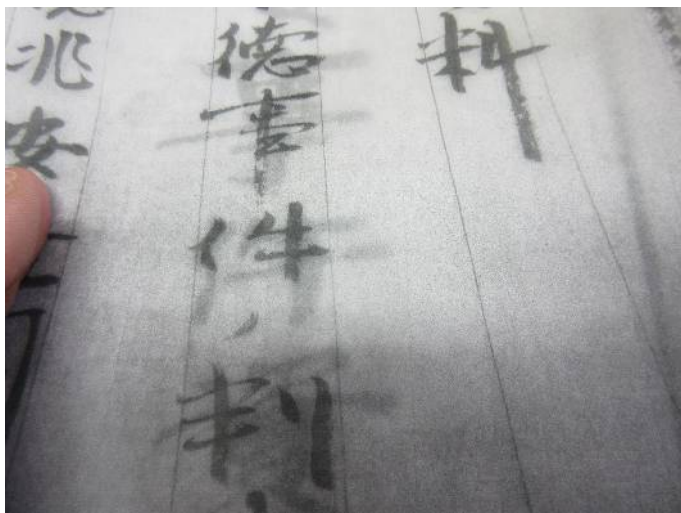
(写真4) 写真1と写真2をトレーシング・ペーパーでコピーして重ねたもの(1)



(写真5) 写真1と写真2をトレーシング・ペーパーでコピーして重ねたもの(2)



(写真6) 写真1と写真2をトレーシング・ペーパーでコピーして重ねたもの(3)



(2) 図書の視点から見えてきたこと

大河内文庫は図書においても労働運動史・社会保障史・経済学史関連の重要文献が見られる。たとえば内務省警保局編『昭和九年中ニ於ケル社会運動ノ状況』(OA4/309.021/Sh97)は、当時の運動家のプライバシーや政治団体同士の関係、オルグ内部の上下関係まで詳細に描かれており、警察の取締の強さを窺わせるものである¹⁶。

同様に経営史、技術史の分野の文献も充実している。航空機関連の文献も多いが、これは一男氏の収集によるというよりは、ロウルズ＝ロイス（世間では車の会社ロールスロイスとして知られるが、元々は航空機エンジンの会社である）研究をはじめ、日本航空とも深い関わりがあった暁男先生のコレクションの関係であろう。ただ彼が特に稀少資料として挙げていたのは、後述の *Transaction of The Newcomen Society for the study of the history of*

¹⁶ 武田知己法学部教授によれば、この本は武田氏もお持ちとのことで、それほど貴重ではないとのご指摘も受けた。

Engineering and Technology, Volume I, 1920–1921, reprinted 1934 であった。

なお洋書に関しては、英米のみならず、フランス語やドイツ語のものもあり、これらの言語圏以外の国に関する書籍も広く集めていることが窺える。出版年が 18 世紀の物からあり、もしかするとその国でも入手できない貴重書がある可能性が高い。それと同時に内容から見て興味深いのは、一男氏が日本の当時の社会問題と関連させて、先進国以外の事例を探し求めていたとみられる点である。*The landless farmer in Latin America: conditions of tenants, share-farmers and similar categories of semi-independent and independent agricultural workers in Latin America*, Geneva: International Labour Office, 1957 (OA5/611.9255/I61) はその事例で、農地改革が終わって 10 年もしない日本の社会状況を想定しての購入であったことは容易に察せられる。

彼が国民生活の有様を常に広く客観的に捉えようとしていたことは、収集した資料からも窺われ、文庫では戦前から戦後の生活関連統計調査が図書の中に紛れ込んでいることも多々見られる。具体的には大阪市社会部調査課編『本市に於ける呉服店員の生活と労働』、1928 年 3 月 (OA4/673.7/H85)、内閣統計局編『栄養に関する統計表』、1931 年 3 月 (OA4/365.4/E39) 等が挙げられよう。

一男氏は「皮肉屋の貴公子的な批評家」「政策を横目に睨む冷徹な評論家」と評され¹⁷、時には師匠である河合栄治郎 (1891-1944、徹したファシズム批判で著名、後に平賀肅学で一男氏を破門) との関係もあり「人格主義とは無縁」とまで言われることがあるが¹⁸、実際はこのように身近な国民生活の有様に目を向けていただけでなく、先人たちの生き方にも強い関心を抱いていた。今村力三郎の影響を受けたのか、幸徳秋水や大逆事件に関する研究書、田中正造に関連する出版物等がよく見られるのも大河内文庫の特徴だが、その関連で言えば、近代日本に何らかの影響力を持った特定の人物 (企業家・思想家・学者等) への関心も高かったようで、彼らの伝記も多い。筆者が数えたところ、和書での伝記のうち日本人を取り上げたものは 363 件、外国人を取り上げたものは 58 件であった¹⁹。特徴的なのは、恩師である河合栄治郎関係文献は 2 件に過ぎないのに対し、大逆事件関係者関連文献 21 件 (幸徳秋水 14 件、菅野スガ 1 件、荒畑寒村 4 件、その他同事件関連 2 件)、河上肇関連文献 19 件、北一輝関連文献 11 件、大杉栄関連文献 11 件 (大杉栄 8 件、甘粕正彦 2 件、伊藤野枝 1 件)、田中正造関連文献 11 件、片山潜関連文献 6 件となっていて、社会主義者あるいは社会主義に親和的と思われる人物の文献が少なくない。彼は「真理の探究とは吾によりよき社会実現のための闘争の一形態に外ならぬ」と直筆原稿の裏側に書き残していることからして (「アダム・スミスに於ける倫理学と経済学との交渉(1)~(3)」、後述)、より良い社会実現のために闘争してきた人物に憧憬の念を抱き、それが蔵書の有様にも影響したと考えられよう²⁰。

¹⁷ 注 4 と同じ。

¹⁸ 粕谷一希『河合栄治郎 闘う自由主義者とその系譜』、日本経済新聞社出版局、1983 年、p.147。

¹⁹ 前掲『大河内文庫目録 I -1』 pp.87-114。

²⁰ 逆に興味深いのは金融関係の資料が皆無に近いことで、一男氏がカネの問題にあまり関心を持っていなかったことが窺われる。

3. 貴重資料（史料）・貴重図書の一部紹介

最後に大河内文庫の特徴的な貴重資料（史料）・貴重図書について、簡単ではあるが具体的に紹介する（記号は板橋図書館での請求番号である）。無論、これら以外にも貴重資料（史料）・図書は多く存在するが、まだ整理中であつたり、網羅しきれていない部分もあること、何といても筆者の狭い眼識のため、紹介資料（史料）・図書及びその内容に限界があることについてはご容赦願いたい。

・「アダム・スミスに於ける倫理学と経済学との交渉(1)～(3)」

一男氏の経済学部卒業論文・助手応募論文の控えとみられるもので、原稿の最後に記された年月日は1928年10月28日となっている。本文は計447枚、後に東京帝国大学経済学部の『経済学論集』掲載を経て、単行本『スミスとリスト』（1943年、日本評論社）の前半部分の原型となった。表紙と目次を除くと、(1)は1～91枚（序と「道徳情操論の出发点」）、(2)は92～210枚（「道徳的価値判断の成立」）、(3)が211～447枚（『道徳情操論』と『国富論』との交渉）で成り立っている。ちなみに(1)の表紙の上には人口問題研究所、三井旧別荘、井上秀子（後の日本女子大学校長）といったメモがあり、これらの研究の一部が人口問題研究所で発表されていた可能性を示唆するものであろう。

この原稿と『スミスとリスト』を読み比べてみると、『道徳情操論』（1759年）と『国富論』（1776年）の間で思想的変化がスミスの中であつた訳でないこと（ドイツの歴史派経済学は前者を「利他的」人間性への信仰、後者を「利己的」人間性への信仰と見なしていた）については同様であるが、フランスの百科全書派の学者たちからの影響に関しては、この原稿では一応重視する姿勢を見せているものの、『スミスとリスト』では、特に『国富論』執筆にあたっての彼らからの影響については完全に否定しているという相違がある。

なお、この原稿ならではの独自の特徴としては、翠山が利用していた特注の原稿用紙（25字×8行）を使っている点で、下3字分を（注）にしていることである。しかしそれ以上に注目すべきは、(2)の原稿の裏側に大河内一男、大河内生といった名前の試し書きのようなものが大量に書かれているだけでなく、「昭和十一年五月」「村安新九郎」（紫安新九郎【1873－1952】、第2次若槻内閣時の拓務政務次官の誤りか）「大阪商科大学 名和統一」（注4参照）といったメモが残されている点であろう²¹。恐らくこのメモは1936年5月に書きこまれているものと考えられ、何か尋常ならぬ雰囲気を感じさせる。さらにここには「真理の探究とは吾によりよき社会実現のための闘争の一形態に外ならぬ」と書かれている。

・ Adam Smith, LL.D. and F.R.S., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, The second edition, London, W. Strahan and T. Cadell, 1778 (OA3/331.42/S642) ²²

²¹ このメモの写真は拙稿「戦前日本における苛烈な人権抑圧と貧困問題—大東文化大学板橋図書館大河内文庫所蔵「足尾鉍毒事件資料」を軸に—」（大東文化大学図書館HPにアップロード）に写真5として掲載してある。

²² スミス研究を専攻されている野原慎司東京大学大学院経済学研究科講師によれば、大東に寄贈された

言わずと知れた『国富論』第2版であり、本書は暁男先生が米国滞在中にボストンの古本屋で1968年に見つけ、日本に持ち帰った物。郵送の際に傷みを恐れてタオルで1冊ずつ巻いたというエピソードがある。現在、第2版については、丸善の試算によれば1000万円程度になるとされている。

本の体裁は初版と同じ四折版で、八折版となった小型の第3版とは大きな違いが見られる（スマスは第2版については本来八折版で出版することを望んでいたらしいが、諸般の事情でできなかったらしい）。さらに本の扉に書かれた題目を見ると、Causes が Caufes に一見読み取れるが、この f に見える表記は18世紀の印刷物でよく使われていたロングエスである。ただしこの表記方法は、エジンバラの出版人であったジョン・ベル（サミュエル・ジョンソン『英国詩人伝』『詩人列伝』の誕生に力があつたことで知られる）が1788年頃に現在のショートエスに切り替えて以降、急速に使われなくなり、現に1789年に刊行された『国富論』第5版では CAUSES に変化している。またスマスの名前の横にある LL.D. は法学博士、F.R.S. は Fellow of the Royal Society の略で、王立学会（協会）特別研究員の意味である。

この『国富論』は初版と比較して用語の変更、脚注の追加、内容にかかわる加筆訂正も大幅に行われている。たとえば、第4篇第3章「貿易差額が自国に不利と思われる諸国から輸入されるほとんどあらゆる種類の財貨にたいする特別の制限について」の節区分（第1節 重商主義の原理からみても、これらの制限は不合理である 第2節 その他の原理からみても、これら特別の制限は不合理である 「預金銀行に関する余論」）は第2版からなされたもので、初版ではこれらの節もこうした表題もなかった²³。

ちなみに初版から2年足らずで第2版は出されたが、この後の第3版（1784年）が出されるまでには6年かかり、これは売れ行きの問題もさることながら、スマスが関税監督官として奨励金に関する知識を正確に得たこともあって、大幅な増補を行ったためと考えられている。

この『国富論』にはジェントリー身分の者の蔵書票があり、当初は高い身分の者が所有していたと思われるとのこと、また本に挟まれていたメモによれば1800年代にドイツに渡った可能性があるとのことであった。なお、その後、2016年5月に板橋図書館で実施した『国富論』の展示に際して、筆者が再度、野原先生からご指摘を受けた蔵書票およびメモを検討したところ、一つの蔵書票はロングエスの使用やエスカッション（楯）を囲む形でサポーターがいる形式から18世紀前半から半ばにかけて作成されたと考えられ、エスクワイア（郷士）身分で、王家の狩猟場と関わりが深かったと思われるアンディ家（ウェールズ在住？）の物であることが判明した。さらにもうひとつの蔵書票は19世紀のもので、ダルモアやグレン・オード等、著名なスコッチウイスキーの蒸留所を営んでいたアレキサンダー・マッケンジー（郷士）の物であることが明らかになった。付言すると、メモは2つあり、野原先生のご指摘は、1st Volume of Smith's Wealth of Nations lent to Dr. M. Griene the 20th. December 1804 No.7720.st（手書き）に基づくものであったと考えられるが、グリーネという地名はオランダにもあるので、ここに出てくるグリーネ博士はオランダ人かドイツ人のいずれかではあるだろうが、現時点ではどちらであるとは判断できない状態にある。ちなみに2枚目のメモは印刷されていて、No.68 Dover Street Mr. Mundell, Fludyer Street, Westminster. とあるが、アレキサンダー・マッケンジーの蔵書票と同じ字体の印刷であることから、このメモはマッケンジー家に渡って以降の物と考えられる。つまり大東に寄贈された『国富論』第2版はウェールズ(?) → オランダまたはドイツ…… → スコットランド → ロンドン（ウェストミンスター）…… → ボストン → 東京というように、ほぼ世界を1周してきたことになる。野原先生には厚くお礼申し上げます。

²³詳細は田添京二『『国富論』各版の異同について』、アダム・スマス、大河内一男監訳『国富論 III』、中公文庫、1978年、p.445を参照。

・ Great Exhibition, *The Art Journal Illustrated Catalogue of the Industry of All Nations 1851*, London, George Virtue

(板橋図書館の表記では *The Industry of All Nations, 1851: The Art Journal Illustrated Catalogue*, OAL/606.933/I42)

1851年の第1回ロンドン万博における美術産業品のカタログにあたり、万博の準公式記録である。したがって *Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations, 1851: official descriptive and illustrated catalogue, in three volumes*, Lloyd Brothers と異なり、工業品の展示物については掲載されていない(ちなみに第1回ロンドン万博に関する1次史料のコレクションの充実で知られているのは中央大学図書館であり、同大学図書館にも同書が所蔵されている)。また当時は、写真自体はあったものの、撮影に時間と資金がかかること、網目スクリーンがなかったが故に印刷物に写真掲載ができなかったため、全てイラストとなっている。

当時人口1500万人程度のイギリスで、第1回ロンドン万博は600万人の入場者を集める画期的な大成功をおさめ、上流階級から労働者階級までが見学したことで知られているが、ここで掲載されている美術産業品の多くは、上流から上層中流向けの物であった。ヴィクトリア朝の家具類等をはじめとする美術産業品は実用性を追求しているものが多いという通説とは異なり、展示品は装飾ばかりが目立つ花瓶や彫刻、カーペット、ソファ、シャンデリア等が多く、機能性や実用性を追求した物は少ない。しかし米国製やベルギー製の四輪馬車(p.168, p.196)、蓋を閉めればテーブルとして機能するピアノ(英仏およびベルギーにあるPape社のもの、p.315)等、僅かではあるが、実用性を重視する物が出てきているのは事実である。

美術産業品でこの時代を象徴するものはピアノである。鉄工業等の発展に伴い、ピアノにおいては、頑丈な鉄製フレームの利用が可能になり、かつ一層張力の高い弦を張ることができるようになったが、当時その先端を行っていたのは米国のチックリング社であった。第1回ロンドン万博にも出展し、このカタログにも当時のピアノの図が掲載されている(p.252)。カタログの説明では、米国の気候の影響で軽さよりも頑丈さを追求する傾向が見られるとしているが、実はチックリング社の技術が米国における著しい機械制大工業の発展と結びついていることには触れていない。この他にニューヨークのMr.J.Pirssonの工場が作製し、当時の世界的人気ソプラノ歌手ジェニー・リンド(1820-87)のコンサートの際に使われた、前後で2人ずつが弾ける大型ピアノも出展されており(p.245)、これは今では殆ど見かけないタイプの珍しいピアノである。

・ *Transaction of The Newcomen Society for the study of the history of Engineering and Technology*, Volume I, 1920-1921, reprinted 1934 (禁帯扱につき請求番号なし)

ニューコメン協会は1920年に英国で創設された技術史の研究会で、現在も続く由緒ある学会のひとつである。本書は初期の紀要を1934年に再版したもので、金額は20シリングと書かれている。20シリングは1ポンドに値し、当時の日本円にすると10円弱に換算できるから²⁴、この紀要が如何に高価であったかが窺える。なお、ここで言われているニ

²⁴ 1935年当時、帝国ホテルの1人部屋料金が10円であった(週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗

ューコメンというのは、実用的な蒸気機関を始めて作製したトーマス・ニューコメン(1664-1729)にちなんだもので、協会の支部は米国でも1923年から2007年まで置かれていた。

ちなみにこの紀要には初代会長となったアーサー・ティットリー(当時機械技術者協会会員、クィーンズカレッジ所属)の挨拶が掲載されているが、この協会の設立にあたってどのような名前にするかをめぐって随分困難があったこと、当初のメンバーは90名ほどであったことが書かれている。付言すると、ニューコメン協会の会則Ⅲによれば、国籍や性別に関係なく、会に賛同する者は会員への道が開かれていたが、1922年3月1日時点のメンバー(大学等の法人会員も含む)123名のうち、大英帝国勲章の受勲者は7名ほどいた他、ニューコメンやリチャード・トレヴィシック(蒸気機関車の発明者、1771-1833)の子孫もおり、いわば列記としたエリート集団であった。外国のメンバーは8名(大学等の法人会員含む)で米国6名、スイス1名、中国1名であり、ヨーロッパ大陸の研究者との結びつきは稀薄であった。またこの冊子にはジョージ・アンソニー・アトキンソンという建築家が協会に加入しようとして書きかけたと思われる申込用紙が入っている。アトキンソンは熱帯地域の建築物の研究者であったようで、後に*A bibliography of native housing in Africa, Building Research Station, 1948*等の研究を残している。

さらにこの紀要には、サセックスの鉄工業の勃興と没落、トレヴィシックのロンドンでの汽車の謎等、今読んでも興味深い論文が掲載されているが、それだけでなく、各論文に関連する写真や版画等が掲載されていて、過去の技術がどのようなものであったか、イメージしやすいように構成されている。

・『戦争目的及戦後問題ニ関スル各国要人主要言説集』、昭和18年(1943年)6月、外務省調査局第一課発行

(米国ノ部第一輯(未定稿)、英国ノ部第一輯(未定稿)、OA4/209.74/Se74/1・2)²⁵

戦争目的資料第一号(米国)、第二号(英国)として出されており、表紙は日本語であるが、中身は全て英語で、どちらも藁半紙に直接タイピングされているのが形式上の特徴である。ちなみにこれらの資料で米国の分が第1号として出されているのは、米国の国際的影響力もさることながら、直接戦火を交える交戦国であったことが影響しているよう。ただこうした情報をどのようなルートで外務省が入手したのかは不明で、如何にしてこの「極秘」資料が一男氏の手に渡ったのかも明らかではない。なお、一男氏は米国情勢には殆ど関心がなかったのか、米国編に関しては書込の跡が全く見られない。

米国編については1941年1月6日の米国議会でのルーズベルトの演説に始まり、1943年5月31日のウェルズ国務次官の演説まで44の演説が収められており、ページ数にして365ページに及ぶものである。如何にして米国外交のあり方や世界平和をどうもたらすか、戦後の問題をどう解決するかといった内容が盛り込まれている。特に1942年1月16日にリオデジャネイロで開催された第3回汎米外相会談での演説で、ウェルズ国務次官が地球の半分の健康と衛生状況、適切な食料や水の配給維持等のためにアメリカ諸国全体の団結

史』、朝日文庫、1987年)。

²⁵ 武田知己法学部教授によれば、外務省や東京大学にも保管されているとのことであるが、一男氏の書き込みがある点で貴重とご指摘を受けた。

を訴えているのは興味深い(p.38)、本来であれば、この会談はアメリカ諸国と枢軸国との間の完全な断絶を目的としていたから、それを表明できなかったことは米国外交の失敗であった。ちなみにこの言説集で取り上げられることが多かったのは、ウェルズ国務次官が最多で13回、ルーズベルト大統領12回、ウォレス副大統領6回である。興味深いのは、ハル国務長官は2回に留まっている点で、ここにはハルとウェルズが対立し、ウェルズが1943年9月に国務次官辞任に追い込まれる伏線が見られる。

英国編は150ページで構成され、1942年5月8日のイーデン外相の平和の基礎に関する演説から1943年6月8日のチャーチルの英国の戦争政策に関する演説まで16の演説が収められている。世界平和をどうもたらすかについては、米国と同じ問題意識であるが、相違としては、戦後の植民地政策についての関心が高い点である。また登場回数で多かったのは、イーデン外相6回、チャーチル首相5回であった。なお一男氏は、英国編に関しては隔々まで目を通し、英国の日本への態度に留意していた他(p.8)、保健衛生政策によって長期的な労働力・戦争従事人口の増加を目論んでいた当時の構想(pp.77-78)等にも関心を寄せ、戦後日本の再建構想のヒントを英国の事例から得ていたと考えられる。

・『増字新刻大節用』、1763年頃～1823年頃(OA 2//49)

同書は翠山のコレクションのひとつであったと考えられる²⁶。翠山は今村次郎(1868-1937)に師事して講談速記を学び、佃与次郎(1866-1931)からは新聞速記や衆議院での速記を学んで、衆議院の他に大阪朝日新聞でも勤務していた経験を持つ。翠山をはじめとする速記者の御蔭で、講談・落語の速記本が広く出回るようになり、講談・落語の伝統的語彙は全国的に身近なものとなった。明治の言文一致運動に与えた影響も大きいとされている。ちなみに翠山は日本速記協会設立にも大きな力を発揮、8期連続協会の幹事に選出されるほどの速記界の大物であった。

彼は新講談作家としても知られており、『藤田伝三郎』(鍾美堂、1912年)や『古今史実美談叢書』(文教書院、1923年)等の数多くの作品があるが、現在でも『真田幸村』はパール文庫から出版され、未だに読まれている点は注目すべきであろう。だが前述の通り2015年時点において、大河内暁男氏の家には翠山に関わる資料や作品、肉筆原稿は殆ど残されていない。

ただその中で残されていた数少ない史料のひとつが江戸時代の百科事典として名高い『増字新刻大節用』であった。和紙に木版印刷をしたもので、310枚の和紙で綴られているが、恐らく翠山が講談本の作成の際の資料として使ったものと考えられる。中身を見ると、最初の頁には世界地図が掲載されているものの、ポルトガル・スペインの位置はほぼ正確とはいえ、米国は見当たらない等、当時の日本人の世界観がよく表れたものである。この他には歴史上の人物や歴代天皇に関する説明、日本における各地域状況の話があるかと思えば、手相や食事に関する日常生活にまつわる話等もあり、内容は多岐にわたっている。

²⁶ 2015年11月13日に部落問題研究所のメンバー数人を招き、大河内文庫の案内をした際に、専修大学の廣川和花氏が『増字新刻大節用』の裏表紙について翠山の借金証文と思われる紙で修繕されていたことを発見された。折り込まれていて読みにくくなっていたが、70円ほどの借金、現在でいうところの35～70万円程度の借金をして返済したのと考えられるとのことであった。廣川先生には厚くお礼申し上げる。

る。

なお、この本の出版は1763年頃（宝暦13年頃）とされているが、何回も版を重ねたようで、翠山が所有していたのは1819年から23年頃に発行された物ではないかと思われる（奥付もなく、最初の目録も不鮮明で解読困難であるが、仁孝天皇を今上天皇とし、女御で夭折した鷹司繫子【たかつかさつなこ、1798-1823】が22歳で女御御方とされていることからある程度推測できる）。ただし版を重ねたからと言って、内容を改変した訳ではないようで、たとえばこの本が1819年から23年出版であれば、樺太が島であることが既に証明されていたはずであるが、その改変は行われていない。

・『曲亭馬琴叢書 化競丑満鐘(ママ) 春蝶奇縁 雲妙間 皿皿郷談』(1889~90年、銀花堂、OA4/913.56/Ta73)

曲亭馬琴(1767-1848)の作品の一部を集めたこの『曲亭馬琴叢書』は数少ない翠山と縁のある資料であり、講談のネタとして集めていたものの一つと思われる。曲亭馬琴こと滝沢馬琴は、翠山の祖先である松平信成の屋敷で生まれたが、9歳で父を失った。この際に松平家からは父が受けていた俸禄は受け取れず、かつ信成の癩癩持ちの孫の小姓を金2両2分でさせられたため、14歳で主家を去ったとされている²⁷。

『曲亭馬琴叢書』は上下巻あり、正式名称は『曲亭馬琴翁叢書』である。この冊子は所収内容（「絲桜春蝶奇縁」、「皿皿郷談」）からして上巻の可能性が高い。また表紙の表記には誤りや略称が見られ、かつ原本と比較すると、絵図がかなり省略され、絵図自体も原作者（歌川豊広他）の物かどうかは不明であるが、中身に関しては馬琴の文体がそのまま再現されている。なお、この手の本は明治期に多く出回ったようで、同様のものが近代デジタルライブラリー等でも見られる。

「化競丑満鐘」（ばけくらべうしみつのかね）

1810年の滑稽本、今でもよく浄瑠璃で上演される、化け物を勢揃いさせた話。

「絲桜春蝶奇縁」（いとさくらしゅんてふきえん）

1812年初版。心中未遂の女と管領山内家の元家臣が結婚するが、死んだ男の祟りで離別する羽目になることから起きる騒動を描く。この本の挿絵が初版時の歌川豊広・豊清の絵が使われているかどうかは不明。

「雲妙間雨夜月」（くものたえまあまよのつき）

1808年の読本。歌舞伎「鳴神」と「水滸伝」に基づく作品で、悪僧と彼に巻き込まれた義士たちの騒動を描く。

「皿皿郷談」（べいべいきやうだん）

1815年初版。江戸歌舞伎でよく使われた本で、前半が謡曲「唐船」、後半が「落窪物語」に基づいて作成される。ひよんなことで出世してしまったがために、そこから事件等に巻き込まれて振り回される男の騒動が描かれる。葛飾北斎の絵が元々は使われていたようであるが、この本の挿絵がそうであるかは不明。

・『みや古能者奈』（『都新聞』毎月附録の「都乃はな」【あるいは「都の華」、「都の花」】第

²⁷ 前掲『速記曼荼羅鉛筆供養—大河内翠山と同時代の速記者たち』（上）、pp.22-3。

37号【1900年8月24日】～第71号【1903年10月17日】、一部抜けあり、板橋図書館表記では都の華、OAP/051.5/Mi76)

この冊子も翠山が新講談作成のための資料として綴っていたものと思われる。ちなみに『都新聞』は1884年9月3日に創刊された『今日新聞』を前身とし、仮名垣魯文を主筆として花柳界関連の記事を軸とした新聞であった。1889年に『都新聞』に改名し、下町的な庶民生活に近いテーマを取り上げたことや芸能面の強さもあり、19世紀末から20世紀にかけて人気に拍車がかかった（しかし『都新聞』は大正期には江戸趣味を稀薄化して、経済面の充実を図るようになり、さらに1942年には新聞事業令に基づき強制的に『国民新聞』と合併させられ、後に『東京新聞』となって現在に至ることになる）。

ここで所収されている「都乃はな」は『都新聞』の月契約購読者に付録（16頁）として渡すといった形を取り、1897年6月2日から始まった。こうした附録の発行はこの新聞が衣食住の流行の先端を行くという意味もあったようである。そのせいもあり、表紙は当時にしては珍しいカラー刷で、67号（1903年3月号）表紙には内国勸業博覧会の様子を描いた絵が掲載され、69号（1903年6月号）表紙にも開園したばかりの日比谷公園をバックにした女性が描かれる等、流行には敏感であった。内容としては料亭の評価、桜の名所、女性の髪形、通俗小説、恋占い等、今のファッション誌を思わせるようなところがあり、かつ読者に都都逸や川柳の応募を呼びかけていたことも人気の一因であったようである。

また一応毎月配布であったが、実際には1897年12月、1900年4月・12月、1901年4月・8月・12月、1902年6月の7回は印刷されていないようである²⁸。そして1903年末の73号で廃刊となった。日露戦争開始間近といった雰囲気も影響したのかも知れない。

なおこの資料では上記分以外に、本来ここにあってもおかしくないはずの1901年9月・10月号、1902年2月～5月号、1903年11月～12月号は抜けており、さらに46号（1901年6月号）と50号（1901年11月号）は表紙がなく、47号と60号は最後の頁が抜け落ちているために発行の月日の確認ができない状態となっている。

（この拙稿は2015年7月31日に大東文化大学板橋校舎 ラーニングコモンズで開催された大河内文庫合同研究会での話および展示説明に加筆・訂正をしたものである）

²⁸ 福田博美「都の華 東京：都新聞社、1897-1903」、『文化女子大学図書館所蔵服飾関連雑誌解題・目録【2005-2009】』、2005年9月。